

榎本武揚とすみだ



東京農業大学客員教授 榎本隆充

曾祖父榎本武揚の生涯は戊辰戦争を境にして、二つに分けて考えることができる。幕末に小身旗本の二男として生まれ、海軍を志ざし、戊辰戦争時には海軍副総裁となる。その後、幕府海軍を率いて蝦夷地に渡り、蝦夷共和国総裁として最後迄、薩長と戦う。これが前半生。明治になり、北海道開拓使を皮切りに、官僚・閣僚として日本の近代化に貢献する。これが後半生である。武揚の後半生はあまり知られていないが、すみだと深い関わりで結ばれるのは明治以降のことである。

榎本武揚は、1836（天保7）年、幕臣、榎本田兵衛の二男として江戸下谷御徒町で生まれる。昌平黌で儒学を学び、その後、長崎海軍伝習所で、航海術、蒸気機関学と共に、数学、化学を学ぶ。此処で約三年間、海軍士官としての教育を受け、科学技術者としての素養も身に就ける。

1862（文久2）年、幕府派遣オランダ留学生となり、四年間の留学中に、専門の海軍の勉強と共に、ヨーロッパの文化・政治・経済・各種科学技術の習得に努める。又、蘭・英・仏・独の各語と国際法をマスターした。

1867（慶応3）年、開陽丸で帰国する。

1868（慶応4）年戊辰戦争が勃発するが、江戸無血開城の後、徳川家は駿府に七十万石で移封が決まる。その結果、碌を失って困窮するであろう幕臣を救う為、武揚は幕府海軍を率いて蝦夷地に向かう。これは、旧幕臣が蝦夷地で北の大地を開墾し、北の備え「ロシアの南下」に当たると考えたが、これは新政府の受け入れる所ではなく、その後、箱館戦争となる。戦いは利あらず、明治2年5月18日五稜郭は開城、武揚は辰の口の牢獄に囚われの身となる。斬首の声が高い中、国際法を熟知し、先端の科学技術の知識を持つ武揚を、日本の近代化に欠かすことの出来ない人物と、その人となりも高く評価する黒田清隆等の助命嘆願により、明治5年1月3日放免となる。

その後、前述の如く北海道開拓使となり、明治7年には、初代の駐露公使として、樺太・千島交換条約を締結させる等、日本を代表する外交官となる。この頃から、すみだを愛する武揚は、現在の向島五丁目土地を購入した。しかし、その後の駐清公使等の外地暮らしや、明治18年以降、初代の通信・農商務・文部・外務の各大臣を歴任し、この間は官舎暮らしであり、本格的に、墨堤の畔に住まうのは、足尾鉾毒事件の責任を取り、農

商務大臣を辞任して、政界から退く明治30年以降となる。

政界を引退した後、武揚は、電気学会・工業化学会・気象学会・地学協会等の会長職を務め、多忙を極めた。又、旧徳川家の、葵会・同方会・徳川育英会の会長に就き、旧幕臣達との交流も欠かさなかった。就中、箱館戦争の戦友達は、土曜日になると、向島の武揚邸に集まり、往事の話に花を咲かせ、その席には、勝海舟や、永井尚志の顔も見られた。又、現在、向島公園に、武揚の揮毫による「墨堤植桜之碑」もあるが、武揚は、桜の堤を愛し、当時墨堤を散策する姿もよくみられている。その折、隅田川で釣りをする少年に声を掛けたり、頭を撫でる話も伝わっている。当時隅田川は、大雨の後、氾濫するのが年中行事の様で、その時武揚は、小舟を操り被災者を救済、励ましたと言われている。

最晩年には、百花園に赴き、



榎本武揚像（墨田区登録有形文化財）

園主と酒を酌み交わすことを楽しみにしていたが、其処にある「永機」の句碑「朧夜や誰を主の隅田川」をみて、上手く無いなあと呟き、俺が直してやると短冊を引き寄せ、「隅田川誰を主と言問はば鍋焼きうどんおでん爛酒」と書き、どうだ上手いだろうと言つて、可笑大笑したと言ふ。このあたりが、江戸っ子榎本武揚の真骨頂と言えよう。明治41年10月26日死去、葬儀は海軍葬で行われ、そこには、幾千人の市民も参加した。当時、武揚が、すみだの人々にいかに親しまれていたかが良く判る。堤通三丁目の梅若公園に、海軍中将の大礼服に身を包んだ銅像（写真）が立っている。あまり知られていない様だが、今後、墨堤と、榎本武揚の歴史を少しずつでも掘り起こしてみたいと思つている。

（平成22年度後期すみだ地域学セミナー）ご講演より）